目白大学　人文学研究
第13号　2017年　203－214

尊敬をあらわす「―（ら）れる」の実態と今後の状況についての考察

A Study on the Current and Future Situations of “―（*ra*）*reru*” which Expresses Honorific

中山　英晋
Eishin NAKAYAMA

Keywords：“ranuki” expression, language change, misuse, honorific expression “―（sa）retekudasai”
キーワード：ら抜き言葉、言語変化、誤用、尊敬表現「―（さ）れてください」

1　「（ら）れる」をめぐる環境

1．1　「ら抜き言葉」

「（ら）れる」の言語変化と言えば、ら抜き言葉が思い起こされる。ここしばらくは、ら抜き言葉の動向が注目されていたが、ついに先日興味深い結果が報告された。2015年度「国語に関する世論調査」でら抜き言葉を使う人が調査開始以来、初めて多数派になる例が出た、というものだ。1995年の調査開始以来、初の結果だというのだから、遅々とした言語変化がついに「誤用」を脱するときが近いと思える内容である。

表1．2015年度「国語に関する世論調査」より抜粋

		（ア）を使う	（イ）を使う	どちらも使う	分からない
（1）	（ア）こんなにたくさんは食べられない （イ）こんなにたくさんは食べれない	60.8	32.0	6.8	0.4
（2）	（ア）朝５時に来られますか （イ）朝５時に来れますか	45.4	44.1	9.8	0.7
（3）	（ア）彼が来るなんて考えられない （イ）彼が来るなんて考えれない	88.6	7.8	2.9	0.8
（4）	（ア）今年は初日の出が見られた （イ）今年は初日の出が見れた	44.6	48.4	6.5	0.4
（5）	（ア）早く出られる？ （イ）早く出れる？	44.3	45.1	10.2	0.5

多数派になる例が出た、との言い方は全てではなく一部であることを示している。表１にあるように、（4）「見る」（5）「出る」は確かにら抜き言葉が多数派となり、また（2）「来る」

なかやまえいしん：外国語学部日本語・日本語教育学科助手

もほぼ同数の結果が出ている。しかし、(1)「食べる」(3)「考える」はまだまだ従来の表現とら抜き言葉の間に隔たりがあるように見える。多数派となった動詞はすべて語幹1音節で語長が短い語である。対して、語幹2音節の「食べる」は30％程度、語幹4音節の「考える」に至っては10％にも満たない。語長が短い動詞は使用頻度が高くなり、言語変化のゆれに対し早くに影響が出やすいのであろうかと考えていたが、井上（1998）は「一般的に短い動詞はよく使われる動詞でもあるから、使用頻度数の方が作用が大きいかと思ったが、研究結果によると動詞の音節数の方が、要因として一番効いている」との見解を示している。いずれにしても、語長が短いということが深く関係している。年齢別では、年代が下がるにつれてら抜き言葉の使用率が高くなっており、次第に従来の表現が減少していくのは明らかである。ら抜き言葉は一段活用動詞と変格活用動詞の可能表現の状態についての問題であるが、これにより可能表現から「ら」が姿を消していく言語変化である。「(ら）れる」は可能表現のみならず、受身、尊敬、自発の意味でも使用される語形であるが、可能の意味では使用頻度が低くなってきており、将来的には完全になくなることもあり得る。それが表1のあらわす内容である。

1.2 「(ら）れる」の現状

「(ら）れる」に関して、可能表現では前段のような傾向が見られるが、その他の意味ではどのような状態にあるのか、五段活用動詞も含めて簡単にまとめる。

表2．可能表現

	第１段階		第２段階		第３段階（可能）
五段活用動詞	書く kak-u	→	書かれる kak-arer-u	→	書ける kak-er-u
一段活用動詞	見る mir-u	→	見られる mir-arer-u	→	見れる mir-er-u（ら抜き言葉）
変格活用動詞	来る kur-u	→	来られる kor-arer-u	→	来れる kor-er-u（ら抜き言葉）
	する sur-u	→	—	→	できる（例外）

表２は井上（1998）を編集・加工したものである。終止形の形態を第１段階、終止形に「arer」が組み込まれた形態を第２段階、終止形に「er」が組み込まれた形態を第３段階と呼ぶことにして、上記の現象を探ってみる。すると、一段活用動詞および「来る」の第３段階を「ら抜き」と読んでいるが、実際は「arer」が入った第２段階から「ar抜き」をして「er」のみが入っている形態であることがわかる。それに先立って変化を起こしているのは五段活用動詞である。なぜなら、第３段階はすでに可能動詞という呼び名を与えられ正用として通用している。そして次に一段活用動詞と変格活用動詞に順番が回ってきているのである。効率性を重視する「経済性の原理」(真田2006）により、活用方法を五段活用動詞と同様にすることで単純化を目指している。また新進性を重視する「創造性の原理」(真田2006）により、受身表現

や尊敬表現・自発表現と区別ができるようにし、明晰化を目指している。これは意味的な曖昧さを避ける重要な変化である。

続いて受身表現を見てみる。

表３．受身表現

	第１段階		第２段階
五段活用動詞	書く kak-u	→	書かれる kak-arer-u
一段活用動詞	見る mir-u	→	見られる mir-arer-u
変格活用動詞	来る kur-u	→	来られる kor-arer-u
	する sur-u	→	される s-are-u（例外）

受身を表現するにあたっては、必ず第２段階の語形が使用されている。可能表現が第３段階まで進んだことにより、受身表現が第２段階を使用しても意味が重複するきらいが減っている。年代別や地域別で見てもゆれや変化の要素が見当たらず、非常に安定した使用が認められる。また、自発表現も同じく第２段階の語形が使われるが、「自発とは、意志とは関係なく自然に行動や認識の変化が起こることをいい、この意味を持ち得る動詞に限られる」（鈴木2015）ため、他表現と誤解される可能性はない。使用される動詞は「思う」「感じる」「案じる」「悔やむ」などに限定されている。

最後に尊敬表現の語形を確認する。

表４．尊敬表現

	第１段階		第２段階	第３段階（尊敬）	
五段活用動詞	書く	→	書かれる	お書きになる	―
一段活用動詞	見る	→	見られる	―	ご覧になる
変格活用動詞	来る	→	来られる	―	いらっしゃる
					お出でになる
					お越しになる
	する	→	される	―	なさる

他の意味とは違い、通常使用の形式が複数認められる。そのため、「（ら）れる」形を使用せずとも尊敬の意味を完全にあらわすことができる。「（ら）れる」形は尊敬に特有の語形ではなく、ほかの表現と重複する語形のためか、特に「東京方言話者にはナル尊敬語の方がレル尊敬語よりも敬意が高いと認識されて」（庵2012）おり、使用することを避ける傾向にあったようである。しかし、「（ら）れる」形以外が万能かというと決してそんなことはない。尊敬動詞は使用頻度の高い一部の動詞のみにしか対応せず、動詞数から見れば非常に少ない。また尊敬動

詞によっては一つの形式で二様三様の意味を担当しているものもあり、分化された状態ではない。文脈から解釈は可能なものの、紛らわしさは否めない。それに、元々の動詞の形式からは似ても似つかぬ形であるため、経済性という観点からは遠く、使いこなすには相応の負担が強いられる。一方「お―になる」形は元々の動詞から規則的に作成することができるが、語幹1音節の動詞は作り出すことができない。これは動詞が短すぎて意味の抽出が難しく感じるためであろう。さらに、語頭に「お」を持っている動詞や複合動詞などから作成すると、反射的に正しく分析できないため、回避されることが多い。「お―になる」形はこのような問題を解決することができない。その結果、動詞によって、状況によって、どの尊敬表現がいいか、絶えず選択しながら使用することになる。国語審議会報告の『新しい時代に応じた国語施策について』（文化庁2005）でも「一つの意味に複数の形が対応することは伝達の効率上好ましくない場合もある」とし、状況に応じた使い分けをやんわりと問題視している。また、複数の語形が使用されている場合、小松（1999）は「①語形変化の過渡期にあるか、さもなければ、②二つの語形が別々の機能を担っているか、そのどちらかである」と断言している。尊敬表現の複数の語形は敬意の程度と言われることもあるが、それだけでは釈然としない。そこで、変化の過渡期との立場で考えてみる。表４を一見してわかるのは、「（ら）れる」形が万能であるということだ。可能や受身と語形が等しいため、意味の判別に支障をきたすこともあるが、「かつて、ルル形尊敬表現と入れ替わった｛お～になる｝型や、それと同じ系列に属するオッシャル／イラッシャルなどが衰退し、現在、レル型が支配的になっていることは、この助動詞の尊敬用法が、ルルからレルに語形を変えて復活した」（小松1999）ことを意味しており、元来の形への揺り戻しのような変化があるとすれば、それは非常に興味深い。尊敬の「（ら）れる」については、半世紀も前に「すべての動詞に規則的につき、かつ簡単でもあるので、むしろ将来性がある」（文部省1952）と論じられている。可能や受身と混同する前に、複数の尊敬表現の内側で迷いが生じてはコミュニケーション上の障害となり得る。「混乱を引き起こしそうな変化なら、自然に抑制される」（小松1999）のが言語変化の特徴であり、この案件でも消して例外ではないはずである。それを示す例として、「（ら）れる」を使った新しい表現が見られるようにもなってきている。

２　新表現「―（さ）れてください」

２.１　インターネットでの使用状況

少し前から、サービス業各種受付やレストラン、またはインターネットの世界で散見されるようになってきた表現に尊敬の意味での「―（さ）れてください」がある。どのようなものが見られるか、Googleで2016年８月23日に検索した結果の一部を記す。

（1）他に乗船されるお客様のためにも早めに<u>連絡されてください</u>。

http://www.vill.tokashiki.okinawa.jp/qtoa

（2）誰の名前、電話番号で予約したかをメモされてください。

http://www.vill.tokashiki.okinawa.jp/qtoa

（3）CDでぜひお写真のデータを残されてください！

http://www.studio-mario.jp/blogs/40/6254/2016/09/9362584.html

（4）是非日頃の疲れをリセットしに来られてください。

http://www.choshuen.co.jp/%E9%9B%AA%E8%88%9F%E5%BA%AD/463/

（5）入院をご希望の患者様、ご家族はまず現在の主治医に相談されてください。

http://www.wadokai.or.jp/hofureha/nyuin.html

（6）救急車で救急病院を探してもらって受診されてください。

http://www.ikebukuro-fujinka.jp/smartphone/contraception/oFaq.html

※下線は稿者による。

尊敬表現に「―てください」が後接する場合は、尊敬動詞または「お―になる」形を使用するのが従来の用法である。「お―になる」形を使用した「お―になってください」を省略した「お―ください」も一般的である。このような従来用法がきちんと整備されていながらも、例文のような上記用法はなぜ出現してきたのであろうか。実はGoogleで「―されてください」を検索すると、上記の例だけではなく、この用法を誤用とみなし訂正したり戒めたりするページのヒットが少なくない。敬語の使用に関して、特に若い世代は正解を求めようと模索していることがあるため、このようなサイトが氾濫するのは納得がいく。しかし、そのようなサイトの中には、この「―（さ）れてください」を（7）のように正しい用法として指南するようなものもある。

（7）「お書きになってください」も「書かれてください」も、それぞれ十分な丁寧さを持っていますから、丁寧さを出す必要に応じて使い分ければ敬語の役目は果たせます。

http://kochan.mypages.jp/kotoba5.htm

「NHK放送研修センター日本語センター顧問」という肩書きの人物がこのように評している。そもそも敬語マナー講座のような場所で「誤用」として指摘されるのは、この表現が広まってきたからこそである。広まっていなければ何も語る必要はない。単に「誤用」と片付けるのではなく、言語変化上の「ゆれ」と見て、この表現が日本語のどのような構造から生まれているのかといった原因や、将来この表現がたどる道筋についても論じてみたい。

この表現についての先行研究は少なく、管見の限り、日高（2006）しか見つからなかった。日高（2006）はこの現象を九州地方で使用される方言という枠組みで捉え、それが全国的に波及しつつあることを論じている。敬語を使い始めた若い世代が、中くらいの敬意の表現方法

として苦し紛れにひねり出した結果、登場した、と考察している。しかし敬意の程度を話題にするなら、敬語を使い始めた若い世代が、果たして「程度」にまで考えが及ぶかは疑問である。三種類の尊敬表現は、敬意の程度が違うとは言われているものの、それをしっかりと認識しながら使い分けている人は果たしてどのくらいいるだろうか。まして、若い世代がそれを行っているとは考えにくい。よって、程度の問題のみでこの表現の出現を論じることはできない。なお日高（2006）は、Google検索により、「書かれてください」の多様な語形（「書かれないでください」「書かれてみてください」など）の出現件数を明記しており、本稿でも現在の状況と比較するために追調査をしたが、それぞれの件数はわずか数件でゼロになる例も少なくなかったため、比較材料として適切ではないと考え、基本語形である「―（さ）れてください」のみを使い、調査する。

２．２　「なさってください」との比較

インターネットサイトの例は最近の例であるが、それより前にも存在していたことを日高（2006）は指摘している。実例を確認するために国立国語研究所コーパス開発センター構築の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ）」を用いる。BCCWJは書籍、新聞、雑誌、白書、教科書、インターネット上のQ&A掲示板など11種類のデータを対象とし、刊行年代はデータにより違うが最大で1976年から2005年までの30年間で、約1億500万語を網羅している。現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスであり、信頼が置けるものとして、状況を概観する。「―（さ）れてください」は様々な動詞と結合し形成されるが、ここでは代表として、最も使用頻度が高いであろう「する」を調査対象とする。従来、「する」の尊敬表現と「―ください」が結合すると、「なさってください」になる。それに代わって、または並行して「されてください」が出現してきたのは、「なさってください」との関係を見るのが先決と考え、両表現を対比する。

表５．「BCCWJ」による抽出

	尊敬表現	受身表現
されてください（「下さい」含む）	39	4
なさってください（「下さい」含む）	152	―

依然として「なさってください」の使用が多いことがわかるが、「されてください」はそれでも全体の約20％を占める勢力となっている。一例を挙げる。

（8）自然に治ると思います。リラックスされてください。
（9）ご僧侶様、もっと勉強されてください。
（10）大体の値段などが載ってる所を貼っておきます。参考にされてください。

（11）今この場所にいたことを思い出されてください。

（12）このことを承知された上で、定形外を利用されてください。

※下線は稿者による。

確かにこのくらいの勢力であれば、言い間違いと済ますことはできないであろう。大切なのは、繰り返すが、これが2005年までのデータである点だ。現在、話し言葉やインターネット等で聞かれ見られていると指摘し、事例を出したが、この時点ですでに書き言葉の媒体に使用されているのである。媒体の内訳をみると「ヤフー知恵袋」が31件、「ヤフーブログ」が7件、「その他」が1件である。書き言葉と言っても、他人に相談する内容の投書や思いついた内容を綴る日記のようなものであり、話し言葉的要素が強い媒体である。言語変化の先陣を切るのは決まって話し言葉であり、拡散が進んではじめて書き言葉への流入が始まる。現在はこの流入が始まった段階、といったところだろうか。

また、「―されてください」は本来、受身表現のみが使用できる用法であるが、表５の件数を確認すると、わずか4件である。このことは、受身表現としては「―されてください」がほとんど使われていないことを意味している。能動文ではなく受身文が使われる理由はいくつか考えられるが、この場面では①動作主を不問に付したい場合と②影響の受け手が与え手より身近な場合が想定される。①の考えでは動作主は「私」もしくは「私の所属する機関」であるが、能動文を使うと非常に直接的な意味となるためである。②の考えでは、文例は次ページに後述するが、経済活動上の営業トークであることが多く、影響の受け手である「あなた」を身近な存在としたい思惑が働いているためである。しかし、使われる動詞が非常に限定的で、一般的には出来事をあらわす受動文と依頼・命令をあらわす「―てください」は、意味上つながりにくく、共起する場面や状況が生じにくい。そのようなことから、尊敬表現の新用法がその隙間に入り込む余地が元々存在しており、「―されてください」は受身表現ではなく、尊敬表現にその軸足が移動してきていると解釈できる。現在のところ、受身表現か尊敬表現かは文脈で解釈が可能なものの、同じ語形では判別することが煩わしいはずである。しかし、一方の意味が限定的な場面でしか使われずに使用頻度が低いのであれば、文脈依存度が大幅に減り判別も容易になるため、もう一方の意味の使用頻度が次第に高くなり慣用化へと突き進んでいくのである。

話し言葉では使用頻度が増してきているが、書き言葉への流入が進んでいるか、つづいて朝日新聞社の記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」を用いる。朝日新聞、雑誌「AERA」「週刊朝日」、現代用語事典「知恵蔵」などを対象とし、刊行年代は1879年の創刊号から調査日までの135年を超える紙面で約1500万件の記事・広告が検索できる。国内最大級の新聞記事データベースであり、最近の事例も網羅していることから、これによる抽出を行った。

表６．「聞蔵Ⅱビジュアル」による抽出

	尊敬表現	受身表現
されてください（「下さい」含む）	17	22
なさってください（「下さい」含む）	119	—

「されてください」は「なさってください」の15％程度であり、BCCWJの抽出結果からわずかに後退している。それでも一定の勢力は保っているが、使用状況は横ばいと見たほうがいいだろう。現状では、書き言葉への流入が進み慣用化が進んでいるとは言いがたい。また、媒体の内容をみても、週刊雑誌や新聞での読者意見欄が目立つ。さらには会話文やその引用といった話し言葉的要素の非常に強い文章がほとんどである。このことから、この用法が見られ始めた時の状況と変わっておらず、まだゆれている段階である、といえる。

そしてもう一つ注目すべきデータとして、「されてください」の受身表現の件数がある。BCCWJでの抽出に比べて割合が増えており、尊敬表現よりもわずかではあるが多い。日高（2005）は「ら抜き言葉」「マニュアル敬語」を題材に「新奇な言語表現を「言葉の乱れ」「間違った日本語」と見なす言説が、マス・メディアを通じて喧伝され、増幅していく傾向が強い。そのようにして増幅した誤用意識は、人々の自然な言語使用を抑制するものとなっている。」としている。この場合も尊敬表現を誤用とした意識が強まり使用が抑制され、誤差の範囲かもしれないが、受身表現の見た目の比率が増えているという向きもあろう。しかし、どのような文章で使われているのかを見ると必ずしもそうとはいえない。抽出した受身表現は、22件中16件が「癒されてください」である。そのほかはすべて1件づつであり、「騙されてください」「翻弄されてください」「説得されてください」「満たされてください」「KOされてください」「追い出されてください」ですべてである。件数が多いからといって、さまざまな事例が抽出できたかというとそうではない。まずほとんどが「癒されてください」であることから、受身表現として使用される場合は、ほぼこの動詞専用の表現となることがわかる。また他の動詞にしても、自分にとって危害が及ぶような意味と見せながら、実は文字通りの意味ではなく、語用論的には安定や喜びをもたらす意味となり、「癒されてください」と同様になっている。つまり、受身表現で使用される「―（さ）れてください」は「癒されてください」に代表される意味で用いられる限定的な用法として存在し、ほかの意味ではなかなか用いられない。そのような状況のため、尊敬表現がこの用法に入り込んでも、意味の混同は置きにくく、定着が進行していると考えるべきだろう。とはいっても、まだ定着というのは言いすぎの感があるのは否めない。

２．３　「お／ご―ください」との比較

森田（1990）は、日本語教育の視点で「―てください」と「お／ご―ください」の違いに触れ、両者の違いを学んでいない学習者はこの表現を単純に敬意の程度の問題であると誤認

し、その結果、思わぬ失敗をしていることがあると指摘しており、以下のような文例を提示している。

（13）しばらくお待ちください。／しばらく待ってください。
（14）どうぞお休みください。／どうぞ休んでください。
（15）奥へお詰めください。／奥へ詰めてください。
（16）どうぞご自由にお持ちください／どうぞご自由に持ってください。
（17）どちらがいいかお決めください／どちらがいいか決めてください。
（18）荷物を私の膝の上にお載せください／荷物を私の膝の上に載せてください。

※以上、稿者による文章改変を含む。

（13）～（15）のような例は、特に両者の差がなく、単純に二つの言い換えが可能ではないかと思われる。しかし、（16）～（18）はどうだろうか。二つの文が同じ意味かどうか、首をひねってしまうのが普通だろう。森田（2006）の記述を借りれば、「―てください」も「お―ください」も一般的に依頼表現や命令表現として扱われているが、実際は「お―ください」のほうには許容表現があるという。（16）を例にとると、「持ってください」は話し手自身のために相手が行為することの依頼であるのに対し、「お持ちください」は聞き手の持ち帰る行為を許容する発話である、としている。これは、動詞そのものに複数の意味が入り込んでいるのが原因と思われる。「持つ」には、荷物の運搬などを負担する意と持って行く・持ってくるの意に分かれる。前者は「―てください」、後者は「お―ください」と結びつくため、機能も分かれてしまう、と論じている。これは、尊敬表現を作成するためには重要で、「―てください」の敬意を高めるために単純に「お―ください」とするだけでは的外れな意味となってしまう危険性をはらんでいるという指摘であろう。依頼・命令表現としての「―てください」は意識の上で、簡単に作り出すことができる。それに敬意を載せて「お―ください」にすると、単純に尊敬の意味合いを付与するにとどまらず、許容表現という別の意味で解釈される可能性が抜けきらず、「お―ください」を避ける意識が働くことにつながる。しかし、避けてもやはり敬意をあらわす必要がある場合の方策として、この「―（さ）れてください」が登場してきたと思える。許容表現ではなく、依頼・命令表現として聞き手に伝達したい気持ちが強くあらわれた結果である。

また、許容表現という考え方ではないが、BCCWJでの検索の結果、わずか1件であるが、以下の事例が抽出できた。

（19）これらを計算に入れて、ある程度は、<u>余裕を持たれてください</u>。

※下線は稿者による。

「余裕を持ってください」を尊敬表現に改める場合、「余裕をお持ちください」とすればいいように思うが、そもそも「余裕を持ってください」は同輩か目下の者に対してアドバイスをする意味を帯びているため、目上に使う尊敬表現とは相容れがたく、違和感を覚える。そこで「持つ」を「持たれる」にするというわかりやすい方法でありながら、従来とは違う方法をとることにより、この表現の持つ意味合いを曖昧にし、尊敬の意味合いを目立たせる効果が期待できる。「―てください」との接続が問題になるものの、違和感を抱く恐れが格段に減る。当然ながら、受身表現との混同も全くない。「―（さ）れてください」が徐々に広まってきた要素として、このように創造性の原理に基づいた意識が働いたからとも考えられる。

3　インタビューからの考察

インターネットやコーパス、新聞記事から、ある程度実例を収集し、「―（さ）れてください」が使用される理由をある程度は考察できるが、実際の話し手（書き手）は、どのような考えを持ちながら使用したのかを探るため、電話でインタビューを試みた。2.1に提示した文例（1）（2）は同一人物による文章で、沖縄県にある離島の船舶運行の担当者が利用者に対して案内するページである。この文章の作成者に次のような質問を施し、どのような表現を選ぶかを尋ねた。断っておくが、尊敬表現「―（さ）れてください」は、現地で使用されている方言でないことは複数の沖縄県出身者に尋ね、確認済みである。

（20）海や自然の宝庫、国立公園の島へ、みなさんぜひ＿＿＿＿＿＿ください。
（21）お待たせしました。食事の用意ができましたよ。どうぞ＿＿＿＿＿＿ください。
（22）島のガイドマップです。どうぞ＿＿＿＿＿＿ください。
（23）満室のおそれがありますので、早めに＿＿＿＿＿＿ください。

間髪を入れず、頭に浮かんだものをさっと言ってほしいということを伝え、答えてもらった。それぞれ（20）お越し（21）お召し上がり（22）お持ち（23）ご連絡、であり、「―（さ）れてください」の使用はなかった。少し緊張して普段より言葉の推敲を行った、とも考えられるが、「お／ご―ください」を選択する傾向にあった。話し言葉の場合、普段使っている表現が何の気もなしに推敲もされず口を突いて出てくるのが普通であろうが、ウェブサイトに掲載される段階になると、書き言葉だという意識が上り、必要以上に考えをめぐらし、お客様への情報伝達というプレッシャーを感じるといった条件からも、細やかに神経をとがらせ、推敲してしまったと考えられる。その結果、まず敬意を表す表現として、「(ら）れる」形を間違いがない形として選択したのではないだろうか。そして「―てください」を後接したのではないかとの推測が成り立つ。もう一つの事例（2）の「メモされてください」はカタカナ語であるため、尊敬表現と「―てください」との接続に迷いが生じる。おそらくは「メモなさって

ください」が唯一の表現であろうが（他に、「メモをおとりください」など動詞を変更して表現することも考えられる）、少し躊躇があったのではないか。最も規則的で簡単な「される」を選び、「―てください」と接続させれば、非常に明快で納得できる。このような意識が働いているのだろう。

言語変化は、経済性の原理や創造性の原理にもとづき、効率的な運用を求めて常に更新し続けていることから起きる。社会環境に変化が起きれば、言語もそれに順応し、新しい環境に対応しようとするのはごく自然である。この例では、船を予約するお客様の顔が頭に浮かび、内容を適切に伝えるとともに失礼のないようにする気持ちが大きく働いている。話し手（書き手）から聞き手（読み手）への一方通行の伝達であるが、それを通して、船の利用者が与えられた情報を元に行動に移していくのである。「―（さ）れてください」の選択は、確かに円滑なコミュニケーションに寄与している。従来からある尊敬表現が使われず、新しく形成された表現が使われるのは、「類推による言い誤りに起因しているからである」（小松1999）。「（ら）れる」形はすべての動詞から形成することができるため、運用効率が非常に高い。何といってもわかりやすい。類推が及ばない不自然な表現はただの言い誤りとして消滅していくだろうが、情報伝達の効率を高めることが話し手と聞き手双方で確認されれば、それが別の場面でも使用され、さらには他の人にも波及し広がりを見せていく。尊敬動詞や「お―になる」形が不都合な面を内包している以上、その不都合を解消しようと調整が入るのは、新しいバランスを求めた環境適応と考えれば、それは極めて当然の成り行きである。「現在、レル型が支配的になっている」（小松1999）との指摘があるように、「（ら）れる」形が尊敬表現の標準になっているようにも感じる。その延長線上の現象として、「おっしゃられる」や「申される」などの過剰表現を耳にすることも出てきた。（現段階では、目にすることはないように思われる。）そのような表現が形成されるほど、「（ら）れる」形は簡潔・便利である。使用が支配的になればなるほど、他の表現が衰退していく。例えば尊敬動詞の「いらっしゃる」については、「行く／来る／いる」が共有しているが、同じ語形のため文脈依存度が非常に高いことは明白である。しかし「行かれる／来られる／いられる（おられる）」が優勢になり、「いらっしゃる」の使用頻度が落ちれば、それは文脈依存を解消し、区別を容易にする動きに違いない。そのような調査は未着手であるが、実行すれば相応な結果が得られると信じている。

この「（ら）れる」をめぐっては、そのほかにも新しい表現が編み出されている。「ご説明される」「ご利用される」といった言い方も聞かれるようになっている。規範的には「説明される」「説明なさる」「ご説明になる」「ご説明なさる」が適切な言い方として認識されているだろう。それでも新しい表現が出現してきているのであれば、それには相応の理由があり、ますます「（ら）れる」が優勢になりつつある現状を示しているのではないだろうか。本稿では、取り上げた事例が少ない部分もあった。もう少し事例を集め、この現象を紐解き、将来像を絞り込んでいく必要があると感じている。引き続き、今後もこの言語事象の動向を注視していきたい。

【参考文献】

庵功雄（2012）『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク　pp98-107、p282
井上忠雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店　p10、p22
小松英夫（1999）『日本語はなぜ変化するか』笠間書院　p45、p77、p201、p215
真田信治編（2006）『社会言語学の展望』くろしお出版　p148
鈴木孝明（2015）『日本語文法ファイル―日本語学と言語学からのアプローチ』くろしお出版　p103
日高貢一郎（2006）「日本語のなかの「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」（9）方言と共通語のはざまで―「～されてください」と「□時前△分」」『日本語学』25（1）明治書院　pp84-96
日高水穂（2009）「言語変化を抑制する誤用意識」『日本語学』28（9）明治書院　pp14-26
文化庁国語審議会（2005）『新しい時代に応じた国語施策について』
森田良行（1990）『誤用文の分析と研究―日本語学への提言―』明治書院　pp61-66
文部省（1952）『これからの敬語』

（平成29年1月17日受理）